歯の痛みと歯科治療

「歯根膜」の炎症で痛むことも

埼玉県立大学教授　吉田 隆

県立大発！ 耳より健康情報 <14>

「歯の治療が長引くのはなぜか」、「歯の神経をとったのに歯が痛むのはなぜか」と質問されることがよくあります。

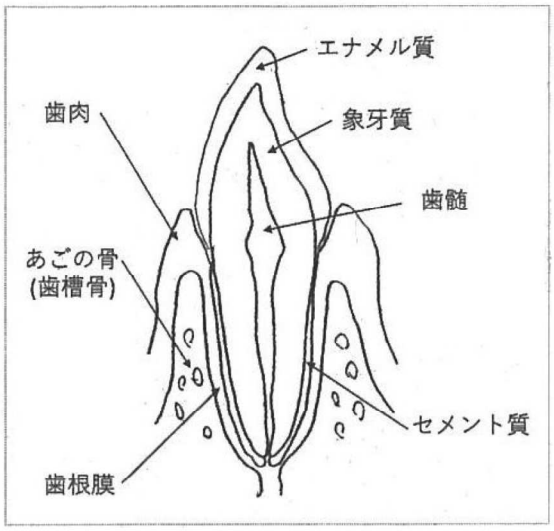
歯はエナメル質、象牙質、セメント質という硬い組織からできています。この硬組織の内部に、「歯髄（しずい）」という神経や血管が豊富な軟組織が存在します。この歯髄が、冷・温水痛や虫歯の痛みを感じます。しかし、この歯髄を治療で除去、または虫歯の放置で死んでしまったにもかかわらず、歯が痛むことがあります。その場合、原因のほとんどは、「歯根膜」組織の炎症に起因すると考えられます。

歯根膜とは、歯とあごの骨の間にある、厚さ150μ（マイクロ）程度の軟組織です。歯はあごの骨に植わっていますが、この歯根膜はクッション（緩衝）の役割も担っています。固い食べ物を噛み砕く際にこの歯根膜がなければ、その衝撃は直に骨に伝わり、噛み砕くことが苦痛になります。

歯根膜が慢性炎症の状態にあれば、固いものを食べたり、歯を叩いた際に痛みを感じたりします。また、急性炎症を起こしている場合は、何もしない状態でも痛みが生じます。つまり、歯の病気には、歯髄で感じる痛みとは異なる、歯根膜組織由来の痛みというものがあります。

もちろん、そのような状態にある歯根膜の炎症も、歯科治療の対象になります。しかし歯の表面に生じた虫歯の治療などとは異なり、あごの骨と歯の間に存在する歯根膜を肉眼で直視することは不可能で、さらに薬を直接作用させることも困難な環境にあります。一般的に歯根膜に対する治療は、歯髄が入っていた空洞を経由して行われますが、この治療は、虫歯などの歯を削って詰める処置と異なり、病気の部分に直接手をつけるというわけにはいかず、加えて複雑な形態をしていることが多いために、治療回数や治癒に時間を要します。

このように、歯の病気はその原因部位によって治療方法に特性があり、治療に時間がかかることをご理解いただければと思います。



あごの骨（歯槽骨）に植わっている歯の模式図